

信じ合う力

丸山 勉

[聖書] ルツ記 3章 1～18 節

しゅうとめのナオミが言った。「わたしの娘よ、わたしはあなたが幸せになる 落ち着き先を探してきました。あなたが一緒に働いてきた女たちの雇い主ボアズはわたしたちの親戚です。あの人は今晚、麦打ち場で大麦をふるい分けるそうです。体を洗って香油を塗り、肩掛けを羽織って麦打ち場の下って行きなさい。ただあの人が食事を済ませ、飲み終わるまでは気づかれないようにしなさい。あの人が休むとき、その場所を見届けておいて、後でそばへ行き、あの人の衣の裾で身を覆って横になりなさい。その後すべきことは、あの人が教えてくれるでしょう。」ルツは、「言われるとおりにいたします」と言い、麦打ち場の下って行き、しゅうとめに命じられたとおりにした。ボアズは食事をし、飲み終わると心地よくなって、山と積まれた麦束の端に身を横たえた。ルツは忍び寄り、彼の衣の裾で身を覆って横になった。夜半になってボアズは寒気がし、手探りで覆いを捜した。見ると、一人の女が足もとに寝ていた。「お前は誰だ」とボアズが言うと、ルツは答えた。「わたしは、あなたのはしためルツです。どうぞあなたの衣の裾を広げて、このはしためを覆ってください。あなたは家を絶やさぬ責任のある方です。」ボアズは言った。「わたしの娘よ。どうかあなたに主の祝福があるように。あなたは、若者なら、富のあるなしにかかわらず追いかけるというようなことをしなかった。今あなたが示した真心は、今までの真心よりまさっています。わたしの娘よ、心配しなくていい。きっと、あなたが言うとおりにします。この町のおもだった人は皆、あなたが立派な婦人であることをよく知っている。確かにわたしも家を絶やさぬ責任のある人間ですが、実はわたし以上にその責任のある人がいる。今夜はここで過ごしなさい。明日の朝その人が責任を果たすというのならそうさせよう。しかし、それを好まないなら、主は生きておられる。わたしが責任を果たします。さあ、朝まで休みなさい。」

ルツは、夜が明けるまでボアズの足もとで休んだ。ルツはまだ人の見分けのつかない暗いうちに起きた。麦打ち場に彼女の来たことが人に知られてはならない、とボアズが考えたからである。ボアズは言った。「羽織ってきた肩掛けを出して、しっかりつかんでいなさい。」ルツがしっかりとつかんだ肩掛けの中に大麦を六杯量ってルツに背負わせると、ボアズは町へ戻って行った。ルツがしゅうとめのところへ帰ると、ナオミは、「娘よ、どうでしたか」と尋ねた。ルツはボアズがしてくれたことをもれなく伝えてから、「この六杯の大麦は、あなたのしゅうとめのところへ手ぶらで帰すわけにはいかないとおっしゃって、あの方がくださったのです」と言うと、ナオミは言った。「わたしの娘よ、成り行きがはっきりするまでじっとしていなさい。あの人は、今日中に決着がつかなければ、落ち着かないでしょう。」

[序] 「七週祭」と「ルツ記」

ユダヤ教の祭りの中に「七週祭」(シャブオット)というものがあります。これは過越祭、仮庵祭と並ぶ三大祭の一つで、元は収穫感謝の祭りです。大麦の刈り入れに始まり、七週後の小麦の刈り入れまで続く週を祝い、過越祭からは 50 日目にあ

たるため、「五旬節」、ギリシア語では「ペンテコステ」と訳されています。この収穫感謝を祝う日にユダヤ人が集うシナゴグでは、今私たちが礼拝で聞いている「ルツ記」が毎年朗読されるとのことです。

系図をとりわけ重んじるユダヤ人にとって、あの**ダビデ王**の曾祖母となったルツの物語は、忘れてはならない大切な物語になります。しかし、このルツという女性は、「モアブの女」であり、もとは**異邦の神**を信じていた女性になるわけです。そのルツのことを、**神様の約束の民イスラエルの系図**に欠かせぬ存在となっていることを毎年朗読し確認しているというのはとても素晴らしいことではないでしょうか。そしてそれは、今、ユダヤ民族の宗教を超えて、救い主イエス誕生の系図として、マタイ福音書第1章に明確にルツの名前が記されているということは、救いの世界的な広がりを示している意義深いことと言えると思います。

[1] ナオミとルツの心の結びつき

この「ルツ記」に登場する人物たちは、読んでいてとても心地がいいですね。善意に満ちています。全聖書の中でも、こんなに素直に読める書物は珍しいです。ここには、血なまぐさい話も、人間の裏切りや、皮肉、或いは嘲りなどはどこにもありません。この「ルツ記」の中心に立っている柱は、ナオミとルツの深い心の結びつきです。この二人は、姑と嫁の関係なのですよね。しかも、一方はユダヤ人、一方は、異邦のモアブ人です。或る意味上手くいかなくても不思議では無い関係です。しかし、二人とも人生の途上で、**悲しみを負った**のです。ナオミは自分の連れ合いと息子たちを失いましたし、ルツも結婚して恐らくそんなに年月を経ずに夫を失い、独りになっています。

そのルツは、「**あなたの民は私の民、あなたの神は私の神**」(1:16)と言って、ナオミが故郷ベツレヘムに帰る際に、ナオミの「あなたはここに残って新しい伴侶を得たらよい」という助言を聞かず、ナオミについていったのです。既に出来ている深い心の結びつきを感じます。年を重ねた義母ナオミとこれからも生きてゆきたいと。

そして、今日のところ、いよいよ、ベツレヘムにおいてルツの、**ボアズ**との再婚が暗示される箇所ですが、とてもとんとん拍子に事が運んでいるに見えます。しかし、これは決して当たり前ではないと思うのです。むしろどこかで破綻してもおかしくない話だと思うのです。けれども、話は素直に流れてゆきます。私は、この話の美しさは、登場人物たちがお互いを尊重しあっている事もさることながら、「**自分たちを超えたもの**」に信頼をしている、その美しさを感じるのです。

[1] ただ神様が与えた出会いだから

それはまず**ナオミ**の心の中の思いに見ることが出来ます。彼女は、今、誰よりも

ルツの幸せを願い、最上の導きを信じてルツに計画を告げます。「わたしの娘よ、わたしはあなたが幸せになる落ち着き先を探してきました。あなたが一緒に働いてきたわたちの雇い主ボアズはわたしたちの親戚です。あの人は今晚、麦打ち場で大麦をふるい分けるそうです。体を洗って香油を塗り、肩掛けを羽織って麦打ち場の下って行きなさい。ただあの人が食事を済ませ、飲み終わるまでは気づかれないようにしなさい。あの人が休むとき、その場所を見届けておいて、後でそばへ行き、あの人の衣の裾で身を覆って横になりなさい。その後すべきことは、あの人が教えてくれるでしょう。」

「私の娘よ」という語からして親身な愛情を感じさせます。(この章の最後にも「私の娘よ」とあります)。そして、あなたが**落ち穂拾い**をすることを許されていた畑の持ち主、親族でもあるボアズもあなたに好意を抱いているようだと思います、ルツにこのように勧めるのですね。今の私たちがちから見ると大胆過ぎないかと思えますが、衣の裾で身を覆って横になるということは、「あなたの庇護のもとに包んで下さい」という求婚の仕方でもあったのですね。ナオミは「**その後すべきことは、あの人が教えてくれるでしょう**」と、あくまでもその結果は神様に委ねています。それはルツも全くそうなのです。初めにルツの願いありきと言うよりも、ルツはナオミの言葉に「**言われるとおりにいたします**」と言いました。ナオミに信頼をしているのです。それはナオミの信仰と生き様を見ていたからこそ言えた言葉ではないでしょうか。

そして、**ボアズ**です。彼の驚きはいかばかりだったことでしょうか！寒くなって目が覚め気付くと、足許に肩掛けを羽織った女性が横になっているのですから。「お前は誰だ！」と驚き尋ねましたが、話を聞いてボアズはすぐに納得がいったのですね。「このナオミの嫁は、**レヴィラート婚**を望んでいるのだな」と。それは、寡婦(やもめ)が生きていくことが出来るために、死んだ夫の兄弟や親戚と再婚するという規定がありましたから。けれども、ボアズは、ルツが単に自分の生活のためという理由以上のものがあることを理解出来ました。ルツの落ち穂拾いの中で自分への好意も感じていたでしょうし、ナオミと共に生きるその誠実さ(「真心」)は、評判にもなっていたようです。けれども、ボアズは、**結論を急ぐことをいたしません**でした。こう言いました。

「この町のおもだった人は皆、あなたが立派な婦人であることをよく知っている。確かにわたしも家を絶やさぬ責任のある人間ですが、実はわたし以上にその責任のある人がいる。今夜はここで過ごしなさい。明日の朝その人が責任を果たすというのならそうさせよう。しかし、それを好まないなら、主は生きておられる。わたしが責任を果たします。さあ、朝まで休みなさい。」——とても誠実な言葉だと思います。ボアズの人柄が見えてきます。その中で特に心に留まるのは、「**主は生きておられる**」という言葉ではないでしょうか。彼もまた、自分の思いを優先するのではなく、神様のご計画を信じ、委ねているのです。

ナオミ、ルツ、ボアズ。彼らの出会いは、ただ神様によるものです。それを彼らも大切にしています。その事実には**“畏れ”**を持っていると言ったらよいでしょうか。ルツ記には、人間同士の**信じあう心、愛し合う心、助け合う心**があると思うのです。そしてそれが破綻することなく、実にうまく回転している。これは、聖書の中でもとても稀有な物語なのではないかと思います。そしてそれが人間にとって不可能ではないのだ、ということも教えてくれているのではないのでしょうか。私はこのルツ記を読んで、「**信じ合う**」ということ思い出した文章がありました。

[2] 「信じ合う」とは

山口瞳という作家がおりました。直木賞や菊池寛賞も取った男性作家です。サントリーに勤めてコピーライターもした、ユーモアのある作家です。既に 1995 年に 69 歳で亡くなりましたが、この人は、とても印象的な言葉をエッセーで残しています。今、世界はかなり危うい緊張関係にあるような気がしてなりません。キナ臭いと言いますか。いたずらに敵愾心を煽ろうとしている力も私は感じます。そんな中、私は、この山口瞳氏のこんな言葉を時折思い起こすのです。彼は戦争というものを嫌います。「私の根本思想」というエッセーの中で、このように語っています。

「私は、ある国が、人を傷つけたり殺したりすることが厭で、そのために他国に攻め込まれて、それで亡びてしまった国家があったとするならば、それで十分だ。それはずっと語り継がれる」「もしも、そのような(非武装の)国を攻め滅ぼそうとする国が存在するならば、そういう世界は生きるに値しないと考える」と。

どう思われますか？私は本当にそうだと感動したのです。甘っちょろいのかもかもしれません。けれども、ここにあるのは、**信じる心**です。**信じる戦い**と言ってもいいかもしれません。**信じるとは、喜んで犠牲を払うこと**でもあると思います。私は誰をも殺したくはない。誰をも憎しみたくない。刃(やいば)を持ちたくない。もしそれで、攻めたければ攻めたら良い。後の歴史が、**戦う事が嫌いで滅ぼされた国があったなあ、と云うことが言い伝えられるならば、それは強力なメッセージになるだろう、**と言うのです。…でも、人間は愛に生きることは出来る筈だ、そんなに簡単に自分たちの存在を貶めるな、私は人間を信じたい、という祈りにも似た切実な思いを感じます。

そして思ったのです。人間への愛を貫いて、正にそのことを、主イエス・キリストはして下さったのではないかと。ローマの信徒への手紙の中に、「**キリストさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかった**」(ローマ 15:3)という言葉(口語訳)があります。そうです、十字架の愛は、愚かしい愛です。辻褄が合わない愛、理性では捉え切れない愛です。何故なら、最も人間を滅ぼすことも出来る権威をお持ちのお方が、滅ぼすどころか、ご自分が十字架の上で滅ぼされてしまったのですから！聖書は「**ここに愛がある**」と宣言します。それは、恩着せがましく死んだと言うことでは全くありません。私たちを、神のもとに立ち帰らせ、新しく**復活の命**の中に造り変える為です！

[結] 「あなたの裾を広げて覆ってください」

「わたしは、あなたのはしためルツです。どうぞあなたの衣の裾を広げて、このはしためを覆ってください。」とルツは言いました。これは求婚（プロポーズ）の言葉だと申しました。この言葉は、2章のボアズという言葉とも関係しているのです。「どうか、主があなたの行いに豊かに報い…主がその御翼のもとに逃れて来たあなたに十分に報いてくださるように。」——神様が、その覆いを翼のように広げられて、あなたを覆って下さるようと、ボアズは、ルツに語りました。

ボアズはまるで神様からの使いのようです。彼は、自分の畑で働いている者たちとも実に美しい関係を持っていました。2章4節ですが、「ボアズがベツレヘムからやって来て、農夫たちに、「主があなたたちと共におられますように」と言うと、彼らも、「主があなたを祝福してくださいますように」と言った。」とあります。これは例えばルター派の教会などで礼拝の中でこのような呼びかけをしています。—「主があなたと共に」「また、あなたと共に」。神様の恵みと祝福をお互いに祈り、呼び交わすのですね。カトリック教会では、ミサのなかで「主の平和」、「主の平和」と、近くの方と挨拶を交わす時を持っています。そういう礼拝も素敵だと思います。川越教会でも考えてもいいかも知れませんね。

今日の物語の最後の方に「ルツはボアズがしてくれたことをもれなく伝えてから、「この六杯の大麥は、あなたのしゅうとめのところへ手ぶらで帰すわけにはいかないとおっしゃって、あの方がくださったのです」と言った、とありました。ボアズではありませんけれども、神様は、ボアズ以上に、私たちを手ぶらでは帰さないのではないのでしょうか？大麥のような恵みを、私たちは神様から頂戴して教会から帰りたいと思います。

私たちが教会で頂く恵み、それはここで癒されること、神様の大きな翼・マントに覆われる、ということだと思います。ナオミもルツも、悲しみを抱えた女性でしたが、その中に沈まずに、**神様のご計画を信じる力を**得ました。これは神様がして下さったこと。そして私たちは今、**主イエス様の恵みで覆われています**。どんなに罪を犯しても、何度でもやり直しがきく、大きな受容、赦しというマントに私たちは覆われる必要がありますし、既に覆われているのです。十字架のゆえに。

「どうか、あなたの裾を広げて覆ってください」。その祈りを新たにさせて頂きましょう。そして、**イエス様の十字架がこの世界に立っていることを心に刻んで**、互いに排除する世界ではなく、このルツ記の登場人物のように、互いに受け入れ合い、信じ合う力を神様から頂いて、新しい日々もご一緒に歩んでいきたいと思ひます。

主が皆さんと共におられますように！

お祈りを捧げます。